

大雑書研究序説

——『永代大雑書萬曆大成』の内容分析から

森田 登代子

一 はじめに——大雑書とは

江戸時代、庶民がなにか行動を起こそうとするとき、いささか直截的だが井戸を掘るとか衣服を裁つといった日々の決めごとから、開運や男女の相性を占うとか、果ては伊勢神宮参りのような旅立ちの是非まで、日常生活のあらゆる領域にわたって行動を規定する指針とすべきもの、ないしは手がかりにできるものにはどんなものが考えられただろうか。手っ取り早く知ろうとすれば運勢を占う暦のたぐいなどを参考にし、それをもとに行動に移したということが考えられるだろう。そのような身近な常識や知識・知恵に照応するもののほかに、日々の戒めや迷信の部類を含み、日常生活の支えとなるもの、いわば行動を起こすための指針事例を網羅し、庶民の知恵袋として大いに流布した書物があつた。近世には生活実用書として、

いわばハウツーものに該当する重宝記（調法記）シリーズや辞書の役割を担った節用集の類があつたが、とりわけ占いを基盤に実生活の諸行為と相互関連づけた書物の刊行をみるにいたった。これらの書物には表紙や題箋に「大雑書」や「三世相」の文字が記されるが、「大雑書」名称が一般的である（図1）。

大雑書は雑書の内容を継承したものである。雑書は元来、平安時代以降の陰陽道や宿曜道の系統をひき、八卦・方位・干支・納音^{なうちん}・十二直・星宿・七曜などによる日の吉凶、さまざまな禁忌やまじない、男女の相性運などを内容とした書物のことである。公家・武家階層の手引書として利用された。近世中期にはこうした暦註に加え、日常生活全般の知識や指針などを相互に巧みに関連づけ、伊勢暦などと同様、農事や家作や日常の儀礼などに大いに参考にされるようになる。具体的には家相・人相・さまざまな雑占・夢判じをも取り

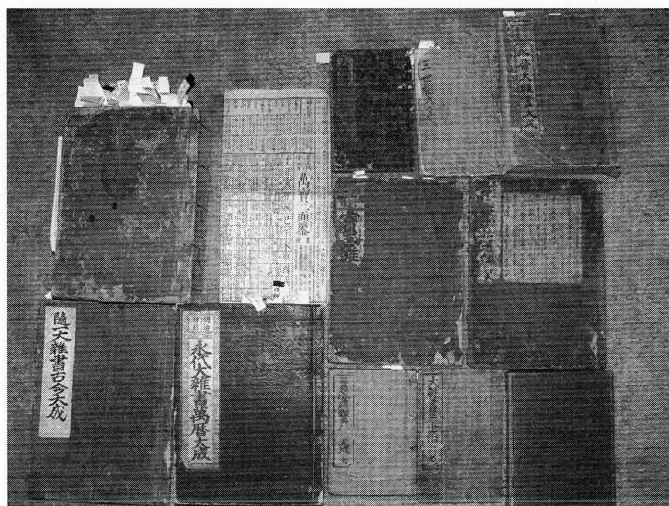


図1 大雑書

込み、内容を肥大化させ百科全書の体裁を帯びるようになった。これが大雑書である。言い換えると庶民の関心をひく生活情報、たとえば暦註や知っておくべきもろもろの基礎常識などを

像に迫るつもりである。また庶民の日記などを参考にしながら、彼らが占いやまじないを意思決定の重要な手がかりにしていたことを検証し、大雑書の果たした役割について言及するつもりである。

二 大雑書の概略と特徴

さきほど大雑書が陰陽道や宿曜道をもとにしたさまざまな吉凶占いや呪いなどから派生したものだと言ったが、では大雑書が実際にどのような場合に用いられたのかについては余りわかっていない。若干の例としては井原西鶴『好色一代男』巻七「口添て酒輕籠」から「恋は雑書の通り、始めよし、後わるし、金性の男ありける」とあって、男女の相性占いに利用されたことが推察される。『浮世風呂』でも「薯蕷が鰻化けた事は、庭訓の往来、今川了俊、其外雑書にも年代記にも見あたらず事だと云け^{〔エ〕}」とある。ここではどうやら事典のように用いたようである。

著わした書籍類が存在し、それを種本にしながら庶民階層にも親しみやすい文面に編集したものが大雑書であると定義づけられよう。本論はこの大雑書がなぜ刊行されるに至ったか、また流布した歴史的経緯について考察する。そこで天保年間に出版された代表的な大雑書のひとつ『永代大雑書萬曆大成』をもとに、大雑書が暦註や雑占といった本来の意図から、日用百科全書の要素を組み入れていった過程を、本屋仲間の諸記録を参照しながら明確にし、その全体

俳諧『天満千句（二六七六）』四より「大雑書会稽山にこめ」や、同じく俳諧の『崑山集（二六五二）』七秋「文月は星あいしやうの雑書哉」、洒落本『見通三世相（二七九六か）』の序幕の「閻魔てづから大ざつ書をひらきて」、あるいは随筆『海録』（一八二三〜三七）二〇「世俗、大雑書と云ふ陰陽家めきたる書に」といった事例が『日本国語大辞典』に収載されている。これらから雑書は相性占いなどの運勢占い全般に、あるいは諸々の事柄を検索するのに利用さ

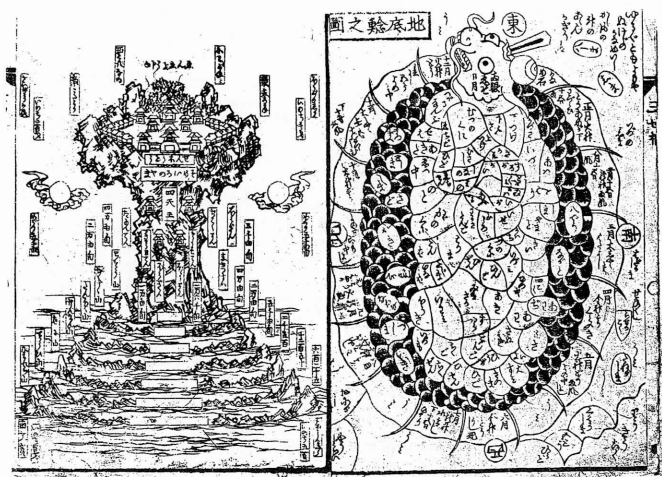


図2 目次の裏扉絵

れた書物であったことがわかる。

大雑書が庶民に親しみ易かった例をあげてみよう。どの種類の大雑書にも目次の裏扉絵には一連の挿絵、「地底鯰之図」「須弥山之図」(図2)が挿入されるのが定番である。須弥山とは仏教の説く無限大の宇宙空間を具現したもので、天保年間、江戸の泉岳寺でこの須弥山挿絵そのままの大道具大仕掛けの見世物があり庶民を楽しませたらしい。「大仕掛大千世界万国一覽」という興行の絵番付が

残されている。

宗教的図像がバラマ化し庶民のアミューズメントパークへと転じたのである。あるいは嘉永五年(一八五二)、大坂角座で新狂言「金鳥玉兎倭入船」の興行が打たれたが、この演目名は安倍晴明の暦註書の

表題「^{ほき}簠簋内傳金鳥玉兎集」に由来することは容易に察せられる。

「金鳥玉兎集」はのちにふれる大雑書の基層的部分をなす書物のひとつである。大雑書の元来の使用方法から派生し、娯楽の領域で活かされたことを知るこれらの事例から、大雑書が庶民生活に深く浸透していたことが看取される。

ところでこの大雑書はいつ頃から、どのような内容を含んだ構成を組み出版され流布していったのだろうか。

陰陽道や宿曜道、仏教の因果説による三世相が導入の契機になっているのはいうまでもない。陰陽道や宿曜道をもとにした典籍は平安時代後期、賀茂家と安倍家両家によって広まった。賀茂家は『陰陽雑書』『暦林問答集』『吉日考秘伝』を、安倍家は『占事略決』『簠簋内傳』(『簠簋内傳金鳥玉兎集』)、『陰陽略書』を著したとされる。これらのうち現存しない書物もあるが、その精神は受け継がれ、鎌倉・室町時代にわたって公家・武士階層に影響を及ぼした。伝存する『簠簋内傳』『吉日考秘伝』などは江戸時代の『群書類従』『続群書類従』(塙保己一編纂)のなかに収載されている。

大雑書は「中世の陰陽書の記事を再編集し、近世の読者を考慮に入れて漢字の多くに振り仮名をつけ、読みやすくした」と説明される通り、中国から伝来した天文書などを素地に、上記の暦註書から必要な箇所を抜き出し、書き下し文にして引用していった。就中『占事略決』『簠簋内傳』『東方朔秘傳置文』といった中世から伝わ

表1 現存・あるいは出版されたと思われる大雑書（暦書）一覧

◎『享保以後大阪出版書籍目録』△『大坂本屋仲間記録』（寛政2）★個人蔵

☆『国書総目録』×『岩瀬文庫図書目録』▲神原文庫（香川大学）●『寛永九年版大ざつしよ』#ナクシス ●東京学芸大学附属図書館望月文庫

書名	申出か出版年	作者	板元	備考
×貞享三年古代三世相				
×三世相小かゝみ	寛永9			
×重撰三世相	寛永12			
×三世相小鏡	天和3			
▲大ざつしよ	正保3		杉田勘兵衛	中本
▲大ざつしよ	寛文3			
▲大ざつしよ綱目	寛文13			大本
▲大ざつしよ綱目	江戸中期			絵入大本
△大ざつしよ	貞享2		明記なし	
☆ふくざつしよ	貞享4		江戸鱗形屋孫兵衛	
▲新撰寶暦大雑書	元禄4		田中庄兵衛	大本
▲大ざつしよ	元禄5		榊原庄兵衛	袖珍本
万年雑書三世相拾遺綱目大成	正徳4 原版		(再刻より類推、所蔵なし)	} 三冊は同種?
★万年雑書三世相拾遺綱目大成	寛政5 再刻		菱屋治兵衛	
★産全相	正徳4原・寛政5再		菱屋治兵衛	
◎錦囊萬代寶鑑	宝暦2	吉文字屋市兵衛	同人	
◎補刪萬曆両面鑑	明和8	野村方卿	富士屋長兵衛	
◎補刪萬曆両面鑑 再板	安永5			
▲大ざつしよ	安永8		いせ屋半右衛門	袖珍本
◎四民通用晴雨便覧天文即鑑	安永9		富士屋長兵衛	
●大雑書（柱刻／目録首）	安永9		永寿堂	中本
◎暦之抄大成（再刻）	天明1	秋田徳右衛門	秋田徳右衛門	
◎再刻掌中年曆賤	天明3	野村善應	富士屋長兵衛	
◎萬曆両面鑑（再刻）	天明6	藤屋安兵衛		
△簞簞 大本	寛政2・文化9		吉市、敦九、藤彌	
△簞簞 首書	寛政2・文化9		藤彌	
△簞簞 小本	寛政2・文化9		塩三、阿吉	
△簞簞 俚諺抄	寛政2・文化9		吉市	
△簞簞 俚諺大全	寛政2・文化9		藤彌	
△簞簞秘決傳	寛政2・文化9		藤彌	
△簞簞初心口傳抄	文化9		藤彌、網茂（文化9）	
△簞簞撰日初心傳抄	寛政2		藤彌	
#萬歳大雑書日用鑑	享和1	上田善七	慶応3板、弘化4板と続く	
△簞簞掌中口傳抄	文化9		塩平、敦九、河八、藤彌、藤善ら	
△簞簞日用大成	文化9		//	
△曆鑒輯要	文化9		藤彌、網茂、河和	
△諏吉便覧	文化9		藤彌、河八、敦九、藤善、網茂	

△いつまで草	文化 9		敦賀屋九兵衛	
△授時暦口訣	寛政 2・文化 9		塩平	
△循環暦	寛政 2・文化 9		河八・塩平	
△増量暦之抄	寛政 2		敦賀屋九兵衛	
△増量暦之抄 京板	寛政 2		敦賀屋久兵衛	
△増益暦之抄	文化 9		敦賀屋九兵衛、伊豫善	
△増益暦之抄 京板	文化 9		敦賀屋九兵衛	
△萬寶雑書	寛政 2・文化 9		吉市、敦九、播松など	
△萬曆大雑書	寛政 2		糸市、天源	
△萬曆大雑書大成	文化 9		河喜	
△永曆雑書天文大成	寛政 2・文化 9		吉市、敦九、播松	
◎永曆大雑書天文大成	文化 3	田宮由蔵	敦賀屋九兵衛	
△増補新板永曆雑書天文大成	文化 6		寛政 2 年に同じ	
△永曆大雑書天文大成 増補文化新板	文化 9		敦賀屋久兵衛	
◎永曆大雑書天文大成 (再板)	天保 6		敦賀屋久兵衛	
△新撰雑書	寛政 2・文化 9		吉市、敦九、播松	
△萬海雑書新撰綱目	寛政 2・文化 9		敦賀屋九兵衛	
△萬海雑書新大成	寛政 2・文化 9		柏原屋清右衛門	
△万年小鑑 半切	寛政 2・文化 9		秋田屋徳兵衛、秋田屋市兵衛	
△三世相小鑑	寛政 2・文化 2		敦賀屋九兵衛、鹽平	
△三世相小鑑 半紙二ツ切	寛政 2・文化 9		秋田屋徳兵衛、市兵衛など	
△改正三世相	寛政 2・文化 9		勝六	
△永代雑書	寛政 2・文化 9		敦賀屋九兵衛	
△拾遺雑書	寛政 2・文化 9		敦賀屋九兵衛	
△寶玉雑書	寛政 2		柏原清右衛門、藤善	
★新板三世相大全増補寶玉雑書	なし		柏原清右衛門	
△雑書大全	寛政 2		柏原佐兵衛	
△雑書大紙三ツ切	寛政 2		柏原佐兵衛	
△大雑書千歳暦	寛政 2		柏原重兵衛、柏原庄兵衛	
△大雑書改正 井上板	寛政 2		加善	
△雑書いろは引	寛政 2		勝尾屋六兵衛、河佐ら	
△大雑書寿命袋	寛政 2・文化 9		秋田屋徳兵衛、秋田屋市兵衛	
△長暦	文化 9		奈良、敦九、河八、藤彌、京浅ら	
△長暦 首書 大本	文化 9		〃	
△長暦 新板 大本	文化 9		〃	
△長暦 小本	文化 9		敦九、河八、京、藤彌、藤善ら	
△如意雑書	文化 9		秋田屋太右衛門	
△寶曆雑書 古板・新板	寛政 2・文化 9		奈良屋長兵衛、泉屋善右衛門	
△寶曆雑書 再板 同文政板	文化 9・文政板		河喜、泉善	
△寶曆雑書 安政再板	安政 2		〃	
△明暦雑書 留板	寛政 2		奈良屋長兵衛、泉善右衛門	
△明光雑書	寛政 2・文化 9		奈良屋長兵衛、泉善右衛門	

書 名	申出か出版年	作 者	板 元	備 考
△雑書萬代曆	寛政2・文化9		奈良屋長兵衛、泉善右衛門	
△萬年雑書 小本	寛政2		泉卯	
△萬歳雑書大成 大本一冊	寛政2		柏清、勝六、敦九	
△萬歳雑書大成	文化9		吉市、秋良	
△萬歳大雑書日用宝 大本	寛政2・文化9		柏清、勝六、敦九	
△萬歳大雑書日用寶 再板	慶応3			
△長曆乃考集	寛政2		不明	
△長曆萬考集	文化9		藤彌、敦九、河八、藤善、網茂、網清	
△萬寶三世相 大本	寛政2		勝尾屋六兵衛	
△改正萬寶 大本	文化9			
△大雑書改正千歳曆	文化9		柏庄	
△男女名付親	文化9		柏原屋清右衛門	
◎萬歳大雑書日用寶	寛政13	下河邊拾水	柏原屋清右衛門	
◎袖珍萬寶年曆重法記	寛政12	小刀屋六兵衛		
◎絵本女雑書	寛政12	岡田玉山	柏原屋重兵衛	
◎萬年曆雑書大成(『萬寶雑書元三御国入』改題)	寛政13		海部屋勘兵衛	
△萬曆雑書	文化9		天源	
◎歴代萬寶即鑑	文化2	小刀屋六兵衛		
◎大成年曆通覧	文化3	鎌田禎蔵	河内屋太助	
◎萬寶二面鑑(再板)	文化5			
◎大成萬寶二面鑑(新板)	文化5		小刀屋六兵衛	
△大雑書萬年曆	文化9		加善	
△大雑書萬年寶蔵 折本	文化9		秋太、河嘉、伊豫善、伊丹善、塩季ら	
△大雑書新撰綱目	文化9		吉市、秋良、敦賀屋九兵衛	
△広益大雑書	文化9		秋田屋太右衛門、秋良	
◎懷中雑書さいわい袋	文化6	布屋清蔵	柏原屋庄兵衛	
◎萬寶三世相(新板)	文化6		勝尾屋六兵衛	
△春秋社日樵儀	文化9		河八、河新	
△春秋社日略樵儀	文化9		河八、河新	
△雑書伊呂波引	文化9		勝尾屋六兵衛	
△萬年大雑書永大曆	文化9		加善	
△壽福雑書	文化9		河太	
△大雑書萬々曆	文化9		河茂	
△新明曆天文臺	文化9		河茂、河和	
◎雑書大全伊呂波引	文化12	鎌田禎蔵	勝尾屋六兵衛	
◎萬年大雑書曆臺鑑	文化12	濱松歌國	加賀屋善蔵	
●萬宝大雑書(再板)	文化13		和泉屋市兵衛	中本
◎萬曆両面鑑(再板)	文化14		鹽屋喜助	
◎懷寶萬年曆	文化14	南里亭基楽	秋田屋太右衛門	
◎万曆両面鑑(再板)	文政3		鹽屋季助	
◎萬曆両面鑑(再刻)	文政5		鹽屋季助	

△増補永曆小箋 折本	文化9・文久1再		鹽屋季助、奈良、伊豫善、銭佐ら	
◎増補永曆小箋	文政5		鹽屋季助	
◎昼夜重寶萬年曆 (再板)	販売見直す			
◎新增訂正年曆掌箋	文政11	鄙屋仙三	鹽屋喜助	
●大雑書	文政11	西村屋與八		
◎寶曆雜書萬々歳	文政12		河内屋源七	
☆こよみうた	文政13	小山田松屋注		
△三世相日用寶鑑	文化9		河内屋菊次郎、敦彦	
◎三世相日用寶鑑	文政13・天保2	和泉屋彌四郎	河内屋菊次郎	
◎新增再刻年曆掌箋	天保3	鄙屋仙三	鹽屋喜助	
◎天保大雑書万年曆	天保5	大和屋桂藏	河内屋菊次郎	
△天保大雑書万年曆 中本	天保8再板 安政板		河長、敦彦	
◎万寶二面鑑 (再板)				
◎ 同 大成 (〃)				
◎万曆両面鑑 (〃)				
◎増補永曆大成 (〃)	天保5		奈良屋長兵衛	
★増補新刊随一大雑書古今大成	天保9		尾陽書肆	
萬曆両面鑑 (再板)	天保10		河内屋太助	
天保新選永代大雑書萬曆大成	天保11		敦賀屋九兵衛 (松村文海堂)	序は天保9
★天保新選永代大雑書萬曆大成	天保13		欠丁	
★壽福三世相大鑑 (改正増補再刻)	天保11	魯鈍翁識	東都書林合板	
#嘉永大雑書三世相	嘉永3	池田東籬翁編・松川半山画		
★三世相解嘉永大雑書	嘉永4	白杵梅彦纂輯	江戸書林播磨屋勝五郎板	歌川貞秀画 鶴峰彦一郎校
#國寶大雑書萬寶選	嘉永6	文光堂主人・柳川重信画		文光堂と柳園種春は同一人物?
#國寶大雑書	嘉永6	柳園種春・柳川重信画		
★大雑書	安政6	梶高賀全識	東都書林 吉田屋文三郎板	187の元板、30丁迄同じ
★大雑書三世相 全	奥付ナシ		東都書林 吉田屋文三郎板	186の後半部分カット
#萬歳大雑書日用寶	弘化4		河内屋佐助	慶応3 河内屋佐助板と同じ
★三世相安政雑書大成 全			江戸栄林堂	小本 『永代雑書萬曆大成』の縮小版?
●三世相小鑑 中本		森尾治兵衛 栄松	錦森堂	
●三世相小鑑 改訂増補版	文久1	藤岡屋慶次郎	松林堂	
★明治補刻永代大雑書萬曆大成	明治30		千葉久栄堂	
同	明治34		〃	
同	大正15		〃	
同	昭和2		〃	39版
同	昭和6		〃	40版
★運氣根元福祿寿万宝大雑書	明治35	中川青龍編	瀬山順成堂	題箋運氣発揚萬録寿寶三世相大全
★万民重宝永歴代雑書大成	明治39		千葉久栄堂	

※重複するものは1つにまとめた。例えば『ふくざつしよ』は『国書総目録』と『岩瀬文庫図書目録』に記載されるが、『国書総目録』にまとめた。

る暦註書が大雑書の中に進取されていったのだが、武家や知識階層ではなく庶民階層を読者対象としたことが大きな特徴で、彼らにうけいられ広範に浸透した書物であった。

いったい、庶民からの需要も多く、数多く出版されたはずなのだが、ところがどのような傾向にそってどんな種類の大雑書が刊行されたか、またどのような理由から大雑書出版に至ったか、その経緯についてはあまりよくわかっていないのが実情である。

そこでまず近世に出版された大雑書の数や刊行年を知る糸口として、『国書総目録』『寛永九年版大ざつしよ』『岩瀬文庫図書目録』『香川大学附属図書館神原文庫』『大坂本屋仲間記録』第十二巻、同書第十三巻、『享保以後大阪出版書籍目録』、各古書店の目録類、それに著者蔵の大雑書類などをもとにさぐった。大雑書の題箋、刊行年月、出版元、特記すべき点などをまとめたものが表1である。列挙分だけでも優に二百近い。実数がさらに増えることは容易に察せられよう。

表1から明らかなように大雑書は近世には諸々の版元から種々雑多に刊行され、明治以降も増補・改訂がなされ、さらには昭和まで続いた。そのなかにあつて『永代大雑書萬曆大成』（天保十一年）は数ある大雑書のなかの完全版ないしは総集編と目される。板元は浪華の書肆、敦賀屋九兵衛（松村文海堂、敦九）である。敦賀屋九兵衛については八節でふれる。浪華では敦賀屋のほか秋田屋太右衛

門が『永代大雑書萬曆大成』の書賣（書籍商）であつた。江戸では須原屋茂兵衛、須原屋伊八、岡田屋嘉七、山城屋佐兵衛、吉田文三郎の各書肆からも販売されている。大雑書が永続性のある出版物であつたことは、庶民階層が必要とした書物であり、彼らの必要とした情報が盛りこまれていたことを明確に物語るものであらう。

このような他板の大雑書刊行事情に大きく力があつたのがこの『永代大雑書萬曆大成』だったのである。また現在、古本市場から入手できる数少ない大雑書のひとつでもある。大きさは美濃本より小型の半紙本で頁数は三一八丁、厚さ六センチに及ぶ。上欄の下方に横線を引いた上層（首書・頭書）と、下段部分から成る。知識や知恵の総体は内容からばかりでなく、あいだに挟まれた豊富な挿絵からも得ることができるのだが、『永代大雑書萬曆大成』自体の具体的な分析については五節でふれることにして、まず大雑書を代表格の『永代大雑書萬曆大成』が中世からの暦註書をどのように取り込んでいったかについて考えたい。

三 大雑書と各暦註書との関係

『永代大雑書萬曆大成』をはじめとする大雑書を出版するにあつてはさまざまな条件が重なつたことが考えられるが、まず大雑書の内容に組み入れるに際して、中世からの書物類が影響を及ぼしていたことを検証しよう。というのも中世から続く暦註書類や『拾芥

抄』との内容を照合すると興味深い結果があらわれるからである。まず『東方朔秘傳置文』との関係を吟味することから始めたい。

以下に示すのは『永代大雑書萬曆大成』上層総目録のうち、『東方朔秘傳置文』と同じ内容に該当する目録を取りだしたものである。

六 日の雑占、九 月輪の雑占、十一 三日月の雑占、十三 月の雑占、十九 暈^{かま}の雑占、二二 星の雑占、二七 北斗星の雑占、二八 彗星^{ふりぼし}の雑占、三十 流星の雑占、三二 天漢川^{あまのがわ}の雑占、三四 虹の雑占、三七 雲の雑占、三九 風の雑占、四十 雨の雑占、四四 雪の雑占、四六 霧の雑占、四九 霜の雑占、五四 地震の雑占、五六 雷の雑占、五八 電^{いかづち}の雑占、六六 八節風の雑占、六七 八風日風雨雑占、七一 立春風の占、七二 春分風の占、七三 立夏風の占、七四 夏至風の占、七五 立秋風の占、七六 秋分風の占、七七 立冬風の雑、七八 冬至風の占、八四 風雨雑占、八八 煙の占

さらに内容を見比べてみる。『東方朔秘傳置文』の「第六 虹を伺ひて吉凶を知事」をひく。虹の雑占のひとつに「二月に西に虹立ハ五穀高直としるべし 三月朔日に虹あらバ米高直と知るべし 四月節に虹あらバ米麦大豆小豆のるい高直としるべし 五月に虹あらバ大麦小麦高直としるべし 六月に虹あらバ秋にいたりて大に高直

なりと知るべし 七月に虹あらバ五穀高し 八月に虹あらバ粟高し 十月に虹あらバ田畑ふ作としるべし 十二月虹あらバ人民わづらふ又虹さいさいあらバ大豆高しとするべし」と解説される。いっぽう『永代大雑書萬曆大成』の「三四 虹の雑占」に上記と同項目内容のものと照合してみると「正月に虹あれば八月にいたりて米の値高し ○二月に虹あれば五穀の値高し ○三月に虹あれば米及び魚の値高し ○五月に虹あれば大豆小豆ともに高し ○六月に虹は麻の値高し ○八月の虹は来春にいたり粟の値高し ○九月の虹は麻あるひは五穀の値高し ○十月は吉凶なし ○十一月の虹は大豆高し ○十二月はなし」となる。ともに天変地異による五穀や麻や魚など生産物の豊作・不作が記されるところは似通っている。もっとも完璧に相似というわけではない。ここにはあらためて例示しないが日や月など他の気候の雑占を細部にわたって照合すると、整合しない内容も含まれている。大きな相違点は『東方朔秘傳置文』の気候雑占には天変地異とそれに伴う政情不安が盛りこまれていることで、『永代大雑書萬曆大成』のほうは旱魃や不作の事象にとどまることである。それでも大雑書が『東方朔秘傳置文』を引用した事実はある動かしがたい。

つづいて『簠簋内傳』に移る。『簠簋内傳』と『永代大雑書萬曆大成』の同じ内容をぬきだし、『永代大雑書萬曆大成』の目次↑『簠簋内傳』巻・目次の順に記し、対応させるとつぎのようになる。

一三 三鏡宝珠の図説↑一一十三 三鏡之方之事、一四 歳
徳神の図説↑一一二 歳徳神之方事、一五 八将神の図説↑一
一三 八将神之方事、十六 金神の図説↑一一六 金神七殺異
説、一七 三月塞の方位↑一一十一 時之塞之方事、二一 曆
の上段十千の解↑二一二 十二支之事、二四 曆中段十二直の
解↑二二三 十二客事、二九 二十八宿吉凶図解↑五一二 二
十八宿姓之事、三一 土公神の解↑三一五 土公変化之事、三
六 社日の説↑二一七 社日之事、三八 八專の説↑二一四二
八專之事、二一四十三 八專間日、四三 半夏生↑三一十
半夏生之事、四五 土用の説↑三一九 土用間日之事、四六
三伏日の説↑三一十一 三伏日之事、四九 臘日の説↑二一八
臘日之事、

五二 曆の下段日並吉凶の解↑二一五 七箇善日、二一九
復日之事、二一十 重日之事、二一十二 血忌日、二一十五
減食日、二一十七 三箇悪日、三一十五 神吉日之事、三一十
六 五基日之事、

五三 曆の外に日取吉凶、○三宝吉日↑三一十四 三寶吉日、
○天空日↑二一六 天牟神之事、○厭日↑二一十九、○厭對
日↑二一二十 厭對日事、○無翹日↑二一十八 無翹日、○四
季悪日↑二一三十一 四季悪日、○五離日↑三一十九 五離日

之事、○保呂風日↑四一九 七箇悪日、○赤舌日↑二一二十九
赤口日事、二一三十 赤舌日事、○不成就日↑二一四十一 不
成就日、○空亡日↑三一二十二 小空亡日、大空亡日↑三一二
十三 空亡時之事、

五六 居室門 ○家造日取吉凶并方角土地 ○家造に向吉方
并忌方 ○柱立家造吉日并悪日↑四一六 八神吉凶之事、四一
九 七箇悪日事、

五八 四神相應の地の事↑四一二 四神相應之地、六一 五
性によって地形善惡の事↑四一一 地判形之事

『簠簋内傳』にはなく『永代大雜書萬曆大成』に挿入されているの
が、三七 犯土の説、三九 十方暮の説、四一 庚申の説、四二
八十八夜の説、四二 半夏生の説、四四 入梅の説并出梅の事、四
七 二百十日の説、四八 冬至の説、五一 節分の説、五一 閏月
の説である。これらは近世への移行段階で新しく組み入れられた季
節に関する語彙群である。つまり、これらの語彙は近世の庶民が日
常生活に必要な季節の言葉であったとも解せられるのである。

目録分だけではわかりにくい、このように比較してみると、三
一八丁ある『永代大雜書萬曆大成』のうち『簠簋内傳』『東方朔秘
傳置文』関係の記述分は半分近くを占めているといっても過言では
なく、両書の大雜書に対する貢献度は極めて高いと言わざるを得な

い。もう一冊の『占事略決』ではひとつの項目や内容が『永代大雑書萬曆大成』の何項目かを挟み多岐に拡散しているくらいがあるので、正確な対照箇所を探すことが難しくここでは省いた。が、参考にしたことは当然予測される。

四 『拾芥抄』と大雑書との関係——「魂呼び」から

つづいて『拾芥抄』をみよう。『拾芥抄』は鎌倉時代末期から南北朝時代に成立し、おもに公家廷臣を対象とした一種の百科全書である。¹²三卷、漢文体で書かれ、歳時・文学・風俗・官位・典礼・国部・神仏・衣食・吉凶など有職故実に関する事象・事物の名目を百科全書風に類従する。日記『園太暦』を残した洞院公賢の撰である。¹³

大雑書の種類については表1に示したように多くの種類が出版されたが、そのひとつに『三世相解嘉永大雑書』がある。その「九曜星くりよう（五丁オ）」の項には「文化元年甲よりすゑ六十年ハ中だん也但し拾芥抄にのするところは上中下三段にかゝらず男女共に羅を一才とし土を二才とすとぞ」と記し、『拾芥抄』からの典拠であることが強調されている。また管見の限りであるが、大雑書が『拾芥抄』から影響をうけたことは次の魂呼び（魂結び）の呪い歌からも首肯される。

『拾芥抄』「諸頒部第十九」にはさまざまな呪い歌がある。そのひとつ「見人魂時歌」では「タマハミツヌシハタレトモシラ子トモム

スヒト、メツシタカヘノツマ誦此歌結所着衣妻也 男ハ左ノシタカヒノツマ 女ハ同右ノツマヲ結也」と記す。『三世相解嘉永大雑書』にも同じ「人魂を見る時の歌」がある。「たまハ見つぬしはたれともしらねとも結びとめたりしたがへのつま」と唱え、「右のうたをとなへ男ハ左女ハ右の下がへのつまをむすぶまねをすべし」と説明する。すなわち『拾芥抄』と寸分違わぬ呪い歌が大雑書にも見出されるのである。不思議なことに、この呪い歌は近松門左衛門『曾根崎心中』にも見出される。心中直前のお初と徳兵衛が人魂を見、「オ、常ならば結び留め繋ぎ留めん」と嘆くのも、この慣習が庶民に膾炙していたことを物語っているのだろう。

身体から抜け出した魂を止める魂結びの呪い歌は、古代から継承されたもののようである。『伊勢物語』と『源氏物語』の時代から既にその言説は広まっていた。およそ三百年を経て、「魂は見えず主は誰とも知らねども結び留めつ下交の棲」と『拾芥抄』に紹介され、約五百年後にも「釜の鳴くときの呪い歌」「地震の呪い歌」などと同じく数多ある呪い歌のひとつとして大雑書にも混入されていたのである。日本文化のアイデンティティといえは大げさであるが、たとえ迷信であっても人々の精神性に寄与したものがあってそれが古代から中世、近世と連綿と引き継がれていたこと、それを大雑書のひとつ『三世相解嘉永大雑書』からも知りえるわけである。大雑書が近世日本生活文化史に大きな役割を果たした蓋然性は高いとい

わねばならない。

大雑書は『拾芥抄』からも多くの知識を採取している。むろん前述の暦註書類と重複する項目もあるが、相互に補完する形で大雑書に組み入れられている。注目されるのが『拾芥抄』の「諸煩部第十九」（以上巻上）「服忌部第十九」「觸穢部第二十」「方角部第三十三」「八卦部第三十四」「生年吉凶部第三十六」「諸事吉凶部第三十八」「養生部第三十九」で、『永代大雑書萬曆大成』上層総目録の「一二三 御改正服忌令」、「九〇 夢はんじ」、総目録では「五五 吉慶門」「六七 移徙転宅の心得」「六八 門小屋別亭廁立る心得」「七〇 井掘井浚の心得」「七二 竈塗吉日」「七五 裁縫門」「七六 衣服裁ときの心得」「七七 疾病門」と照応する。これらの見出しからもわかるように、天候などの現象や日時を占うという暦註本来の立場もさることながら、竈を塗る日、井戸を掘る日・浚える日、廁を造る日、衣服を裁つ日、親族が亡くなった時自宅に謹慎する期間などなど、実生活の諸活動に踏み込んで、なおその行為を正当化するための知識や知恵の拠りどころになるように機能したことが理解できる。俗に言う、開運を願う行動を起こす前に吉凶を占い、あるいはまじないをおこなうその契機とするために大雑書を開く、つもりなのである。生活に潤いを与えるというと穿った理解になるが、そのような占いやまじないといういわば儀礼的手順を装うことが社会文化的に意義あることと認識されるようになったことがうかがえる。

るであろう。

大雑書に『拾芥抄』の内容が多く取り込まれたのにはいろいろな理由が考えられるだろう。特権階級であった公家や武家必携の儀礼や格式に関する知識や常識を庶民生活レベルで享受することに意味があると考えたのではなかろうか。つまり大雑書出版には公家・武家世界の教養や文化の総体を庶民レベルで受容するという目論見があったと考えられる。

なお『永代大雑書萬曆大成』には、『拾芥抄』のほかに『吉日考秘伝』（賀茂在盛撰、長禄二（一四五八）年奥書）と同じ内容が含まれる。¹⁵『吉日考秘伝』は室町中期の作で、平安末期から鎌倉期にくられた暦註書を踏襲しながらも、若干趣きを異にし、養生論や呪術性が新たに加えられた書物である。¹⁶大雑書類への引用についても考慮されたと思うが、『吉日考秘伝』がどのように大雑書に編入されたかについては本稿では省いた。

五 中世から近世へ——『永代大雑書萬曆大成』

このようにして中世からのさまざまな暦註書が注ぎ込まれ、段階的に情報が集積されていったものが大雑書なのであった。翻って『永代大雑書萬曆大成』から上述の書物による引用箇所を省いた部分が近世になって新しく組み入れられた知識や知恵の集積部分ということになるだろう。つまり二五六頁に示した前述の季節の語彙群

に加えて、具体的には上層総目録では後半部分の「九一 呪秘傳」「九二 救民妙藥鈔」「九三 食物製造秘傳」「九四 諸事重宝記」「九五 急難を救秘傳」(「百二四 痘瘡呪秘傳」が新しく加わった情報である。総目録の方では「九三 出行羈旅門」「九七 農家門」「百 奴僕門」「百一 売買門」(「百六 米相場休日例」「百七 食類門」「百九 雑事門」「百十 方位門」(「百五三 人相総論」から最後の「二百九 早繰年代記」までがそれに該当する。「九三 出行羈旅門」「九七 農家門」の中には一部『拾芥抄』の内容と重複する箇所も含まれるが、『永代大雑書萬曆大成』の後半部分には従来の暦註書を若干手直した部分、もろもろの重宝記類からの引用、さらには食物料理法や保存方法から米相場や旅行に関する今までと違った知識や情報が組み入れられた。これらの項目が近世になって新しく挿入された内容である。すなわち従来の『吉日考秘伝』の養生論や呪術的内容をさらに発展させた項目であり、生活のノウハウにあたる雑事一般の部や実利的部分、さらには商業的分野が近世に新しく編入された部分である。畢竟、これらの情報が近世の庶民にとっての関心事であったと推測できよう。

元来、暦とは年月日や曜日を知るために作られたものではなく、生死往来にかかわる対象を照らすものであった。「すべて暦ハ万事を起し行んとする時開くもの」であつたればこそ、人々は災禍を避け運命を切り開くべく多様な運勢占いを記載する暦註書に頼り、そ

れゆえ陰陽道は庶民生活の隅々にそれと意識されずに溶け込むようになっていった要因は大雑書から始まったのである。

こうして大雑書は江戸時代に「生活化された陰陽道」の書籍版として日本人の意識に広範に浸透していった。陰陽道などの歴註書の情報基底に日常生活の暮らし向きに必要な知識を多様に盛り込んだものが大雑書であつたというわけである。

大雑書の出版の始まりは一七世紀中ごろ、元和・寛永の頃からといわれている。戦乱が収まり社会が落ち着きはじめると、庶民階層の行動に規律や規範を求める意識もおのずと生まれ、社会の安寧のための秩序構築を図ろうとする機運が生じる。大雑書はこれらの要求に応えるものであつたと推測される。

以上のように、大雑書の出版には中世以来の陰陽道関係の暦註書『占事略決』『簠簋内傳』『東方朔秘傳置文』『吉日考秘伝』等と百科全書的な内容である『拾芥抄』を中心に、その淵源が求められる。大雑書といえは占いが中心で、迷信ばかりで軽薄な内容が満載されたものと思われがちだが、そのじつ中世からの日本文化の集積を土台にして構築された書物であつたのである。

六 大雑書に関する先行研究——節用集との相違など

庶民階層で利用されたはずの大雑書であるが、どのような時に使用されたかその実態が明らかではないことは先に述べた。そもそも

先行研究論文すらほとんど見当たらない。その中にあって大雑書研究に先鞭をつけたのは橋本萬平氏である。大雑書を多く収集しそれらを比較研究した。その著書『大ざつしよ』⁽¹⁹⁾と、前節に引用した大雑書研究の嚆矢ともいふべき『寛永九年版大ざつしよ』からは、概略的に大雑書の成立や特徴が知れる。

橋本氏は大雑書は庶民の日常生活の指針に役立つものとして百種類近くも出版されたと思われること、どんな家庭でも一冊は買っていたのではないかと⁽²⁰⁾いう。実際のところ、大雑書は表1に掲げた二百冊近くのほかにもっと多く出版されたかもしれないのである。

近世庶民の生活を窺い知るには無視できない書物であるのだが、しかしながら多種多様のものが出版されたわりには現在古本市場に現れるのは非常に少ない。たとえば見つかったとしても手垢で汚れ、水が染み、本を繰る度に触れた本文の端の方がちぎれ、ボロボロに近い形状である。筆者が所有する十数冊の大雑書も同様で、余り良い状態ではない。またたとえば日常生活では使用頻度が高かったといふところで、歴史的にも文化的にも価値を持たないものとして処分されてしまわれやすい書物でもあった。

大雑書のそのような使われ方に注目したのが日用百科型節用集の小口条痕から使用頻度を分析した横山俊夫氏の研究である。⁽²¹⁾江戸時代の礼法に関する考察の一つの糸口に節用集を用い、具体的には高野山の花園村などの対面調査をおこない節用集がどのようにに受容さ

れていたかを研究し、そこから節用集や大雑書を繰る際の手垢や磨耗から使用頻度を計量化した。その着眼点は独創的であった。しかし横山氏は大雑書を節用集の巻末部を拡大させた書物とみなし、節用集と大雑書の特徴を同じ部類としてとらえた点に問題が残る。というのも、ともに百科全書的な知識や知恵の集積が基本であっても、節用集は語彙検索が最大の用途であるのに対し、大雑書は陰陽道や暦学、三世相、呪い、籤、さらには相性・人相といったいわゆるサブカルチャー的な領域に嗜好の中心が置かれている。

要するにつまりは両書は全く異なる用途目的で刊行されたのである。時代が下がるにつれ情報が肥大化し両書間に相似の情報が収載されていたと見るべきなのである。節用集ならば美本で古本市場に残され、多くの類書が復刻されている現状からも、⁽²²⁾大雑書と節用集では所有者の使用方法や態度に基本的な相違があったと考えざるを得ないのである。

七 大雑書の変遷

一七世紀以降の社会の安定や秩序といった構造変化が大雑書出版を促す原動力になったことを指摘したが、つづいて刊行の担い手である本屋仲間の動静に関心を向け、彼らの版權保護政策が大雑書出版の大きな礎になったことを論じたい。

元禄年間、都の錦は本屋仲間の会話仕立てにして書籍の嗜好が目

まぐるしく流行り廃る上方の出版の有様を次のようにあらわした。

「京本屋「あきなひの勝手に、好色本か重宝記の類が増じや」といへば、大坂本屋「仰ればそふじや。すでに大坂におゐて、家内重宝記が出来はじめしより此かた、其類棟にみち牛に汗するほどありしかれども此ごろは、はや重宝記もすゑなり、万宝にうつる。諺解古ふなれば、詳解あらたまり、大成すたれば集成おこる」と、重宝記が汗牛充棟とたとえられるほど数多く出版され、続いて万宝↓諺解↓詳解↓大成↓集成と、本屋仲間が次々趣向を変え生活百科全書関係の書籍を出版していたことが読みとれる。

それは大雑書にかぎっても同様であつた。『永代大雑書萬曆大成』の序文は「三世相大雑書の世に行はるゝ事年久しく又其の棟に充牛に汗する事になりぬ」で始まり、「人の上の吉凶暦の注釈人相手段陰陽一わたりの事はいえはさら也妙葉秘術の奇まで世の人為になるべき限り」と大雑書の全容を披露する。そして「己が家に物する雑書五種有⁽²²⁾（傍線筆者）下なるハ万宝雑書中なるは拾遺雑書上なるハ萬歳雑書其上なるハ永曆雑書すぐれて上なるハ此永代大雑書にて萬の事載ずといふ事なし」と、収載された内容量が增大するにつれて題箋が万宝雑書↓拾遺雑書↓萬歳雑書↓永曆雑書↓永代大雑書と変貌したと述べる。もちろん題箋を微妙に変えることで新しい読者を開拓するという出版側の意図も考えられるのだが、かくして雑書の変遷過程から時流に敏感な出版元の活躍が察知でき、一八世紀の終

わりごろから一九世紀後半には大雑書の百花繚乱時期があつたと推察できよう。

八 大雑書と版權問題

『永代大雑書萬曆大成』の板元敦賀屋九兵衛は未公認本屋仲間二四軒のうちの二軒で、大坂心斎橋順慶町に書肆を開き、元禄年間から明治期まで続いた老舗である。⁽²³⁾敦九をはじめ、大坂の本屋仲間の出版活動の動静については『大坂本屋仲間記録』全一八巻に詳しく報告されている。とくに第一巻から第九巻には公儀からの申し渡し・仲間の定・出版にともなう本屋仲間の紛議記録の「差定帳」「鑑定録」「裁配帳」が載る。

近世の出版は、まず本屋仲間にし、板株を得、正規の手続きを踏んで開板・出版が許可されるのだが、いわゆる海賊版（重版・類版）が跡を絶たなかった。それゆえ『大坂本屋仲間記録』第九巻までは本屋仲間の版權に関する争議や裁判の記録を載せており、本屋仲間同士が結束し重版や類版から自己の權益を保護した有様が看取される。

一方、大坂町奉行所に提出した大坂で出版された書籍名と板元（版元）名が明記された「板木総目録株帳」も寛政二年（第一二巻）、文化九年（第一三巻）がそれぞれ影印判で収載されている。「板木総目録株帳」に記載されると板元の權利が発生する。この權利は今

表2 『永代大雑書萬曆大成』に引用された書物

目 録	引用された書物名
2 渾天儀之図	天経或問、類経
頭書	
9 月の図説	世説新語
26北斗七星図説	廣博物志
33虹の図説	漢書、天文誌、天経或問
36雲の図説	天中記
38風の図説	莊子
43雪の図説	朱子語類 〃
53地震の図説	[近來西洋の説] [文珠伏龍の説]
55雷の図説	法苑珠林
89灯花の占	事林広記
90夢はんじ	清明秘鈔夢判事
91呪詛秘傳	酉陽雜俎
	呪重宝記
93食物製造秘傳	家内重宝記など
94諸事重宝記	諸事秘傳抄
95急難と救秘傳	
96増益年中行事	
97・98本朝年代記上下	
103感通即座占秘傳	感通傳
下段	
2 天地日月広大図	天学名目鈔、類経、天経或問
10曆書権輿之説	曆日諺解
15八将神の図説	陰陽書
18鬼門方位口訣	海外経
36社日之説	天中紀、朱子語類
39十方幕の説	循環曆
40彼岸の説	天驗記
44梅雨の説	天中紀、荆楚歲時記
	曆府通書、本草綱目
50節分の説	世諺問答
52曆の下段日並吉凶の解	通鑑綱目、礼記
	礼記
	曆例
121懷妊身持鑑	列女傳、女重宝記
151人相指南秘訣	本朝人相考
201潮汐の満虚の説	事文類聚
202元三大師籤の由来	元三大師御籤諸鈔

日のそれより格段に重みがあった。というのも、版權は有効期間に限りがなく、しかも所持する板株は、重版ばかりではなくより広範な類版までも排除することができたからである。そのうえ板株は単独で所有しても複数の本屋が共有（相合株）してもよく、さらには質入れも自由にできた。板株は各本屋が出版活動・商業活動をおこなううえで好都合なものであり、最大の拠りどころであった。²⁶⁾ それゆえ長友千代治氏は近世後期刊出版界の編集出版者の立場は絶大であったと評する。本屋仲間には版權の確立や保護がなされていたのに対し、作者側には著作権がなく潤筆料のみにおわり、印税を受け取る

制度がなかった。それゆえ売文はあっても、作品に対する名誉や尊厳の保障はなかったのである。²⁷⁾

実はこのような板元を保護する体制が多種多様な大雑書を輩出するのに寄与したと考えられるのである。というのは何度も指摘したように大雑書が庶民生活に必要な諸々の知識や知恵を網羅し百科全書的な体裁を整えるためには、諸分野の書物から引用する必要があった。その引用する書物群が自分の版權物であればならん問題がなかったからである。

点については、表2『永代大雑書萬曆大成』に引用された書物から、おおよそ明らかにされるはずである。例えば唐の仏教百科全書『法苑珠林』や『天経或問』『酉陽雜俎』『本草綱目』『荆楚歲時記』『列女伝』などの典拠が文中に記されている。直接引用したものであるいは孫引きによる引用か真偽のほどはともかく、これらの書籍を用いることで物議を醸すことはなかった。問題はわが国で出版された書籍から引用する場合である。

大雑書には前述の『占事略決』『簠簋内傳』『東方朔秘傳置文』『拾芥抄』や、表2で表記した『本朝人相考』『女重宝記』『家内重

表3 敦賀屋九兵衛板書籍一覧（『大坂本屋仲間記録』より作成）

項目	寛政2年度分	文化9年度分
天文	初学天文分野図 一枚	天文分野図 焼株
	東方朔秘傳置文	民用晴雨便覧
	民用晴雨便覧 2	風雨賦国字解
	風雨賦国字解 2	大時占候 5
	大時占俗 5	日用晴雨便覧
曆書	増益曆之抄 2	増益曆之抄
	同 京板 2	同 京板
	萬寶雜書	萬寶雜書
	永曆雜書天文大成	永曆雜書天文大成
	同増補新板文化六已六月出来	同増補文化新板 天保六再板
	新選雜書	新選雜書
	萬海雜書新探綱目	萬海雜書新探綱目
	三世相小鑑	三世相小鑑 半紙
	永代雜書	永代雜書
	拾遺雜書	永代大雑書萬曆大成安政三再板
		拾遺雜書
		大雑書新撰綱目
		天保大雑書万年曆天保八・安政三再板
	萬歳大雑書日用宝 1 大本	萬歳大雑書日用寶 慶応三
	大雑書頭書 井戸板	大雑書首書 井戸板
		いつまで草
		長曆
		長曆 首書
		長曆 新板
		長曆 小本
易書		諏古便覧
		簾簾掌中口傳抄
		簾簾日用大成
	新選俚諺抄	新選俚諺抄
	新選掌中指南	新選掌中指南
相書	陰陽方位便覧附24宿絵図 3	天門八卦指南抄
	陰陽五要奇書	新選掌中指南
		東方朔秘傳置文
		元三大師御鑑抄 大本 2
	人相小鑑	人相小鑑
	同 水鏡集 5	同 水鏡集 5
	同 発明傳	同 発明傳 小本
	同 手引草	同 手引草 小本
	同 九面之図 折本	
	柳莊相法 5	柳莊相法 5
	本朝人相考 3	本朝人相考 3
	相法和解 2	相法和解 2
	同 諺解 5	同 諺解 5
	同 玉振録 5	同 玉振録 5
	同 秘蔵訣 3	同 秘蔵訣 3
	同 示蒙解	同 示蒙解
	同 類編	同 類編
	同 摘要	同 摘要
	相兒秘要	相兒秘要
	手相即座考 1 小本	手相即座考 1 続編
	当北相法口篇 5	
	方角即考全 小本	
	方角重宝記	
	年中吉方一覧一枚摺 折本	
	方鹽精義 2	
	相法神心論 5	相法神心論発揮 5
	同 染指 1	同 染指 1
	同 無盡蔵 7	同 無盡蔵 5
	同 秘受解	同 秘受解 5
	人相三面鑑 1 折本	人相二面鑑 折本
	同 六観(マ、)官 4	同 窺管
	(マ、)人相 1	田舎人相
	相学欣承	相学便蒙
		神相精通
		手相即座考 小本
		南北相法
		同 後編
		人相千百年眼 6
	真相精廻	
	日用辨惑書	
	同 口訣 一名豹虎巻	

宝記』『呪重宝記』『暦日診解』から全文抜書きか、部分抜粋がなされている。一例を挙げると、『暦日診解』（柳精子、寛政元年刊）の序が『永代大雑書萬曆大成』の「十 曆書こよみはじまり権輿之説」に一語も違えず流用されているし、『本朝人相考』（三巻三冊、郭西翁述、仙掌斎編、安永二年）は全文引用されている。上層（頭書）「九十 夢はんじ」は『夢はんじ』（藤村秀賀）から、下段「二百二 元三大師籤の由

来」は『元三大師御籤諸鈔』からの採録である。以上を総合して、飛躍を恐れず推理するならば、板元がこれらの板株を持っておれば誰の許可をとることもなく、そして難なく大雑書に借用あるいは転用することができたという結論に達するであろう。⁽²⁸⁾これについては敦九の出版物から「天文」「曆書」「易書」「相書（人相）」の項目と照合すればより明らかになる。表3「敦賀屋九兵

「板元書籍一覽」を見ていただきたい。敦九はこれらの出版物を文言どおり、あるいは文面を少し編集しなおしたり、庶民向けの分かり易い文言をつけ加えたりして、大雑書に編入していったのである。

とくに敦九は、人相関係は得意分野であったようで、「板元総目録株帳」(文化九年)からは三三種類の人相関係出版物のうち、二八種類が敦九の単独株または相合株のものであった。ちなみに『本朝人相考』は敦九の単独株である。『永代大雑書萬曆大成』には『本朝人相考』三冊分が全部転載されていることは先に述べたが、十分うなずけることであった。²⁹ 天文関係でも寛政二年では『東方朔秘傳置文』『日用晴雨便覽』『天時占候』『民用晴雨便覽』(文化九年は相合株)が敦九の単独株である。『永代大雑書萬曆大成』に天候の図説や雑占が多く記されるのも誠に当然のことといわねばならない。³⁰ 敦九は『簠簋日用大成』や『簠簋掌中口傳抄』も出版している。『簠簋内傳』からの情報はおそらくこの二冊へ転載されたと考えても間違いないであろう。

表からは省いたが、敦九が文化二年に提出した出版目録は、医書関係では産科・痘瘡関係書物を中心に三二種類であった。「節用」「往来物」「用文章」「女用」「百人一首」「茶之湯」「教訓読本」の項目や「雑之部(諸礼や重宝、歳時、秘伝などを含む)」の項目にも単独、または相合株の形で敦九の名が多々明記されている。反対に、文化九年の易占関係では一八四種類の本のうち敦九が株を持ってい

たのはわずかに五種類の書籍であった。少なくとも『永代大雑書萬曆大成』は他の板元の大雑書に比して易占の項目が少なくと推察されるのではないか。

とどのつまり次のように考えられるのではないか。敦九は自己株から大雑書にふさわしい内容を寄せ集めて編集すればよかった。また須原屋茂兵衛(江戸)や柏原屋清右衛門(大坂)をはじめ、大雑書を出版しようとする書肆は各自板元株内の書籍を元にして大雑書の体裁を整えた書物を出版することができた。重版・類版(海賊版)は本屋仲間の紛争の種になったが、相合株でも所有しておれば求版や再版の段階でも大雑書刊行に手を染めることができた。大雑書の目次では基本的な部分では大差がないものの、板元によって掲載される内容に少しずつ相違が見られるのもこのような事情に基づいている。つまり「大雑書」というのは二番煎じの、穿った見方をすればいわゆるリメイク出版物だったのである。なぜならば、すでに出版された自己株の書籍に新しい情報をつけくわえ手直し、出版したものが大雑書であったとみなすことができるからである。当時の出版事情が大雑書出版に寄与したといえるのである。

次に著者についても少しふれておこう。『享保以後大阪出版書籍目録』³¹に随ってあげてみると、『萬曆両面鑑』の野村方卿、『大雑書萬寶藏』の北尾仁右衛門、『雑書大全伊呂波引』の林義内、『絵本女雑書』の岡田玉山、『萬歳大雑書日用寶』の下河邊拾水、『永曆大雑

書天文大成』の田宮由蔵、『懷中雜書さいわい袋』の布屋清藏、『雜書大全伊呂波引』の鎌田禎蔵、『萬年大雜書曆臺鑑』の濱松歌國の作者名が見出される(表1参照)。

田宮由蔵は田宮橘庵ともいう。『嗚呼矣草』^{おつたりいさ}、『東牖子』^{とうぶし}の著者であり、濱松歌國は『摂陽奇観』の著者で、ともに文筆家である。岡田玉山や下河邊拾水は画工である。即断はできないが、著者と板元が同一人物の場合もあるいはあったかもしれない。当時の戯作者、随筆家たちが名を連ねていても、彼らが一人で書き下ろしたということとは考え難いことは大雑書の出版段階の事情で十分理解できる。大雑書刊行の構想は板元の手任せられ、彼らは編集や挿絵を中心に大雑書出版に参画したのだろうと考えられる。

九 各大雑書にみられる特徴

大雑書の完成された形が敦九の『永代大雑書萬曆大成』であることは間違いない。大判、三一八丁(安政三年補刻は二六六丁)の分厚い生活情報は庶民にとって非常に有益であったろうと思われる。そうでなければ天保十三年から昭和まで類板を含め増補・再刻・新版と何度も世に出るわけはないからである。明治以降、木版から銅版本や活字本へと印刷技術の変化も見られ、大雑書の内容も些少の改良や変化が加えられることもあったが、大きな変化は見られず、『永代大雑書萬曆大成』の模倣と踏襲にとどまった。⁽³²⁾ 大雑書は『永

代大雑書萬曆大成』で歩みを止めたといっても過言ではないだろう。『永代大雑書萬曆大成』は板元が大坂ということもあり、これはのちにふれるが上方の人々しかわからない文化的情報が鏤められている。

当然ながら江戸庶民向きの大雑書も多様に出版されたし、従来とは違った活字の丁合をする尾張板元大雑書のようなものも出版された。大雑書の根幹をなす曆註―占い、呪い、戒めに関する情報にはそう大きく変わりがないが、江戸、尾張、上方といった地域の特徴をあらわす姿勢も見受けられる。少しながら具体例をあげてみよう。

『随一大雑書古今大成』(小田切忠近『歌月菴喜笑』補正・図画、中本)は尾陽書肆、松屋善兵衛・玉野屋新右衛門・美濃屋伊六の相合株で、天保九年の開板である。⁽³³⁾ 曆註関係などは他の大雑書と大差はないが、目次の組み立てが異なる。一般的に二段組の書籍は上段(頭書・上層)と下段と二段組の構成からなり、目次の見出しは番号順で、上段は上段のみ、下段は下段のみで記事内容が次の丁へと進行する。ところが『随一大雑書古今大成』は目次が(一)日の図説、(ろ二)六十図、(は二)破軍星、(は二二)八将神の事、…中略…(さ二)三伏日、(さ二二)指神の法の事、(さ三三)三世相明鑑、というように見出しがいろは順で、同じ丁内で上段(一)下段(ろ二)と書き進む。ここが近世の一般的な書籍の体裁と違う。尾張地方では四冊の大雑書の所在が確認されるが、筆者が実物を手にできたのは



図4 酒を振舞う図
〔『三世相解嘉永大雑書』〕



図3 ト占に従事する人々の群〔『随一大雑書古今大成』〕

『随一大雑書古今大成』である。残念ながらこのいろは順式が尾張全体の傾向か否か検証できずにいる。

『三世相安政雑書萬曆大成』は江戸馬喰町、宋林堂板である。袖珍本で三六丁。一見、稚拙な出来である。本文の内容は他の大雑書と変わらないが、ページ数を表す丁を記さず、目次がない。そのかわ

り内容が一目で知れるような項目を見開き裏に記す。

「須弥山図解」「暦日略注抄」「天象法説論」「五性六十図」「六曜日線法」「二代守本尊」「破軍星線法」「男女相性鑑」「呪符秘傳」「九曜星早線」「四季皇帝占」「三世相明鑑」「有卦無卦」「夢占吉凶」「懷胎十月図」「四目録占考」「男女相性名頭」「曆外吉凶日」「灯花吉凶占」「汐満干線法」

これらの内容を捲っていくと、『須弥山図解』『男女相性鑑』『有卦無卦』が『国書総目録』に記載されているので、おそらくそれらの書物のどこかの箇所から転載したと推察される。「天象話説」は『天象法説論』のことだろうか。それならばこれも『国書総目録』に載っている。「呪符秘傳」は表3で明らかのように『呪重宝記』が準拠である。それ以外についてはどの書物が典拠かは不明だが、おそらく必要な部分だけを採取したのだろう。

『三世相明鑑』について。これは『国書総目録』に所在の記載がない。が、『尾張の書林と出版』に菱屋金兵衛板『三世相合鑑』の記載を見るので、おそらく同じ書ではなからうか。『随一大雑書古今大成』の中に「三世相明鑑」の見出しがあるし、『永代大雑書萬曆大成』にも「一三六 新增補三世相明鑑」の小見出しがある。実在し、そこそこ流布した書物であったと考えられる。

また『随一大雑書古今大成』には英泉の銘によるト占に従事する人々の群(図3)の挿絵がある。銘はないが、酷似した版画が『壽

『福三世相大鑑』に載るので、尾張と江戸の本屋仲間相互による大雑書刊行があったのではないかと推測される。

『三世相安政雑書萬曆大成』『壽福三世相大鑑』（袖珍本、九二丁、魯鈍翁作、東都書肆、鶴屋喜右衛門・岡田屋嘉七・和泉屋卯兵衛の相合板、天保十一年改正増補再刻）『三世相解嘉永大雑書』（袖珍本、七三丁、白杵梅彦纂輯、歌川貞秀図、播磨屋勝五郎板、文苑閣、江戸書林十軒分の相合板、嘉永四年）はともに江戸で出版された大雑書で、相互に似通った項目と内容を持つ。ちなみに『三世相解嘉永大雑書』は『三世相安政雑書萬曆大成』の見出しの「一代守本尊」「三世相明鑑」の項目を除けばすべて共通する内容である。

『三世相解嘉永大雑書』の絵師は歌川貞秀である。文に添えられる挿絵は江戸の風俗や時代世相を巧みに織り込んでおり、江戸庶民の嗜好や信仰に関して傍証となる図像といえるのではないかと思う。

「生性吉凶解」では、「甲戌生まれハ山上の火性にて慈悲ふかく人を助くる性分ゆえ……以下略」とあり、アイヌの人々に酒を振舞う図が載る（図4）。彼らは全員長髪、髭面、大きな耳輪をぶらさげ、厚司織模様の衣服を着る。アイヌの人々との交歓の図を用いたのは、蝦夷に対する庶民の関心の深さが示唆されよう。あるいは同項目の癸未生まれでは「諸事心にまかせず苦勞おほし富士権現を信心すればさかゆべし」と述べ、富士権現へ登山する巡礼の姿を載せるのも、富士山信仰の流行を跡付ける証左となろう。また「致死期時」の箇

所でも、遠くに富士山を望む相模湾の絵が添えられる。かくして江戸庶民の関心事や馴染み深い景観が挿絵に映し出される。上方の庶民対象ならばこのような挿絵になるわけがない。

「生日吉凶」では「前略……この人慈悲ぜんどんの心ありてひんきうの者を救ふ事あるゆえ悪事災難を遁れ子孫はんじやうすべし」と記され、米の入った升を持った武士と、全員そけた藁ぞうり履きの乞食の家族の挿絵がそえられる。父親と思しき男は長方形の袋を差し出すのだが、その袋は縫い目まで施され、一枚の布が袋状に縫製されていく様子が一目瞭然にわかる。このように『三世相解嘉永大雑書』の図版は細部に至るまで風俗的にも目配りが効いているため、挿絵だけを繰っても十分楽しめるものである。大雑書が暦註やト占用に利用されたばかりでなく、娯楽的な意味合いも兼ねていたと考えられる所以である。

大雑書刊行時の版權問題と大雑書の地域的特徴に留意し論を進めてきたが、もうひとつ留意することがある。それはアイヌを描いた挿絵からも示唆されることであるが、時代の変化に対する世間の関心を版元が迅速にかぎとり大雑書にとりいれていったことである。

『女重宝記』は元禄五年（一六九二）苗村丈伯（艸田寸木子）が上梓し再版されたものと、加筆訂正して高井蘭山が編んで弘化四年（一八四七）出版したものと二系統がある。とくに出版に関する箇所（女重宝記三之巻 懷妊の巻 子育て様）は一五〇年経っても記述内

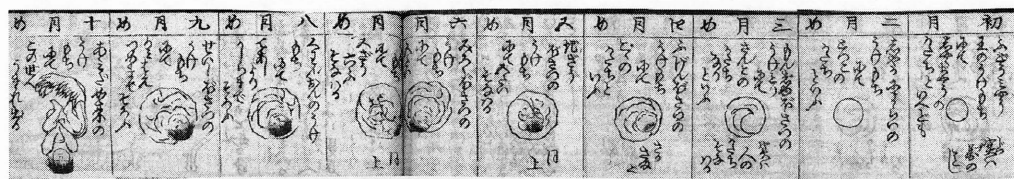


図5 懐胎図（『三世相解嘉永大雑書』）

容に変更がない。そのいくつかが『永代大雑書萬曆大成』の「百二一 懐妊身持鑑」「百二二 産の心得并腹帯の由来」「百二三 懐胎十月図解」「百二四 妊娠中好食物 ○同じく忌べき食物 ○産後好食物 ○産後忌べき食物」などにも収載されている。ところが高井蘭山編集の『女重宝記』の「懐胎十月図解」では、妊娠初月が錫杖、二月めが独鉗、三月めが三鉗、四月めに五鉗の先から人間の頭が生じ、五月めから人間の姿で描写する従来の図像に疑問を呈し「医書に云胎内十月の図をみたもふべし」と述べる。一方図版は、従来の懐胎十月図解と、新しく「医書に云」うところの図像の都合二種類の胎内十月図解を掲載した³⁴。このような矛盾した図版を記載したのは高井蘭山自身混乱したからかもしれないが、大雑書は版元によって様々な対応と処置をおこなった。

従来からある苗村丈伯の懐胎図を踏襲したのは『永代大雑書萬曆大成』である。

『壽福三世相大鑑』『三世相安政雑書萬曆大成』も苗村側の図像である。が、『三世相解嘉永大雑書』は違った。袖珍本なので多くの内容を盛り込むことは不可能なため、出産は「懐胎十月図解」だけ載せたのだが、「児の内の胎内にやどるハむすぶの神のおしわざにてやどる事也そのかたちハ開体新書^{かいたいしんしょ}にくはしく見へたり仏説にいろいろあるハ方便也としるべし」と記し、一・二月は「○のかたち」、三月めは「実ハ人のかたちそなハる」、四月めは「さかさま也」と解説し、高井蘭山の説明する新しい懐胎図に近いものを載せた（まったく同じ図像というわけではない）（図5）。開体新書は「解体新書」の誤字であろう。いずれにしても仏説からの懐妊説明を否定していることは明らかで、『三世相解嘉永大雑書』には新情報が盛りこまれたと解すべきだろう。

『解体新書』が世に出たのは安永三年（一七七四）である。天保、安政に出版された大雑書類は元禄期刊行の『女重宝記』の懐胎十月図を用い、弘化四年改訂『女重宝記』で新種の懐胎図が表示されたのち、『三世相解嘉永大雑書』はそれに従ったとみるべきであろう。おそらく『解体新書』は庶民にも周知のことであったのだろう。その世評を背景に信憑性のある懐胎図として採用したのではなかろうか。大雑書は編集段階で臨機応変に改変していくこともあり得るわけで、旧来の占いや呪いの集積ばかりでなく、庶民が関心を示す新情報も取りこんでいったことがこれからも看取されるのである。



図6 腋に薬を塗る

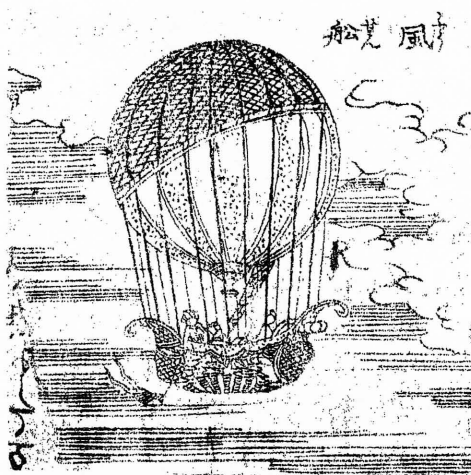


図7 風船と記された気球

一〇 挿絵から見た『永代大雑書萬曆大成』の娯楽性と時代性

編集者に絵師の名が記されるのは、言うまでもなく大雑書に挿絵が多く掲載されるからである。上記の岡田玉山や下河邊拾水のほかに浦川公左などが大雑書の挿絵に銘を残している。『三世相解嘉永大雑書』でも見られたように、挿絵は地域性や時世を映す鏡でもあった。それはたんに本文解説に役に立つ画ばかりではない。主題を離れ挿絵相互で関連性を意識させ、あるいは隠喩と思われるような伏線を張ることもあった。『永代大雑書萬曆大成』からめぼしいも

のを拾ってみると、「産の心得」では鎧をつけ佩刀し、箆をつけ弓を持った女性が描かれる（一四七丁ウ）。新羅出兵時の神功皇后が妊娠していたという記紀を淵源としていることは明らかである。「雷の雑占」の挿絵は相撲取りが土俵に立つ。雷から有名な相撲取りの雷電（六八丁オ）を連想させるわけである。「急難を救秘法」の金瘡の説明では忠臣蔵を連想させる松の廊下の刃傷沙汰場面（二六二丁オ）を描き、「本朝年代記」の高倉院の箇所は歌舞伎狂言「平家女護島」の登場人物、俊寛と思わせる設定である（一九九丁ウ）。直接的には本文とそれほど関連性があるわけではなく牽強附会と思われるかもしれない。が、心憎い演出であり、あたかも謎解きのような趣向が感じられるのである。

笑いを誘う画もある。「救民妙薬鈔」の「腋臭の薬」には上半身裸の太った女性が腋に薬を塗る画（一三二丁オ）（図6）であり、「喉腫痛む薬」では三方を三段重ねにし、その上に高下駄を履いた曲芸師が扇子を持ち口上を述べる（一三六丁ウ）。『永代大雑書萬曆大成』が「救民妙薬鈔」という章を設け当時の民間医療を大幅に取り入れる一方で、これらのようにユーモラスと皮肉さの相半ばする形で知らしめていたこともわかるのである。

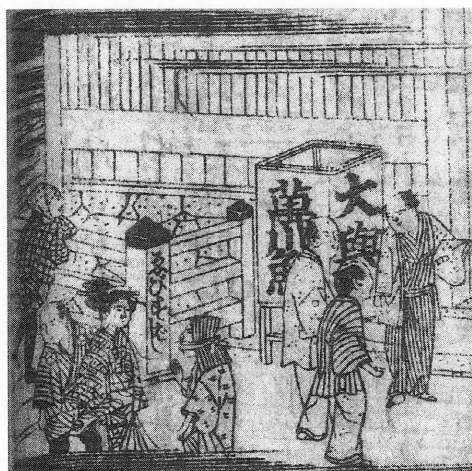


図8 戎橋界隈の絵（『永代大雑書萬曆大成』）

ところで鎖国と

はいつでも海外からの情報は庶民の関心を沸き立たせずにはおかなかっただろうし、大雑書がそれを取り入れないほうはなかった。地球儀を前に椅子に座る紅毛

首肯されるのである。

一一 『永代大雑書萬曆大成』のなかの上方表現

大雑書は地域の特徴に根ざしていたこと、それは江戸刊行の大雑書の事例で説明したようにとりわけ挿絵に織り込まれやすいことを述べた。

そのなかにあって『永代大雑書萬曆大成』は全国版にふさわしい挿絵が収載されていると考えられる。その第一は京都の観光地や祭り行事に関係するものである。大文字（二七八丁ウ）、鴨川の川床（二七六丁ウ）、祇園祭（幌をつけた武士行列）（二七二丁ウ）、清水寺の舞台（七一丁ウ）などで、上方以外の人々から見ても楽しめる企画であつたろう。第二は三都の地勢図を載せていることである。これは上層六〇 京師海水遠近の図説、六一 京師地勢の図説、六二 東都海水遠近の図説、六三 東都地勢の図説、六四 摂陽海水の図説、六五 大阪地勢の図説から類推される。

そうはいつでも何度も述べたように『永代大雑書萬曆大成』は敦賀屋九兵衛板であり、大坂の庶民の親しみやすい挿絵が多いことも事実である。たとえば中之島の蔵屋敷にある蛸の松（八四丁ウ）、塩干魚や干鰯取引の中心地であつた永代濱（一一〇丁オ）などで、これらは『浪華百景』にも描かれる商業的な地域であつた。

食文化の一端をあらわすのも大坂の特徴といえようか。二〇八丁

人と思しき男性（二三丁オ）や同じような構図でその紅毛人の前に筵をひき聴講する日本人（五七丁オ）が描かれる。とくに興味をひくのが「風の雑占」で風船と記された気球（四三丁オ）の写生である（図7）。一七八三年フランスで発明された気球はすでにわが国でも知られていたことが、この挿絵からもうかがえるからである。

このように大雑書の図像を詳覧すれば、枚挙に遑がないほど社会的実相や文化風俗に遭遇する。大雑書は庶民の関心に留意し、彼らの感性や庶民文化の程度を嗅ぎ取りながら挿絵にして見せたという何よりの証であろう。たとえそれが卜占、呪いのたぐいの集大成であつても、である。大雑書は庶民に馴染み深いもの、話題になりそうなもの、知的好奇心を煽るものは貪欲に取りこんでいったことが

ウには味噌田楽と木蓋つきの鉢を前にしてあぐらをかく男の絵で、淀川と銘の入った徳利とこれも玉川と銘の入った岡持が置かれている。おそらく玉川という仕出屋から食事をとった設定なのであろう。

淀川という大坂の造り酒屋もあるいは存在したのかもしれない。これが架空のものでないと推理する理由は、六一丁ウに描かれた戎橋界限の絵(図8)からである。あびすばしの橋のたもとに「萬川魚」と「大與」と記した看板が見える。大与は『守貞謄稿』に名のある料亭としてその名があげられ、天保十一年の料理屋番付では行事の筆頭に上げられる川魚生簀専門店で、『花の下影―幕末浪花のくだおれ』にも店構えが大きく取り上げられているほどである。

ほかにも道頓堀川を前に数多くの料亭や芝居茶屋が軒を連ね股賑を極めた浮世絵があり、そのなかにひととき大きな料亭「川魚大与」も描かれている。これらの料亭や芝居茶屋は浪華の食道楽風景を展観するものとして注目される。そして戎橋界限の図の確かさから『永代大雑書萬曆大成』に収載された挿絵の多くが風俗や文化を知りうるうえで、十分信頼に耐えうるものと判断される。

江戸の風俗を挿絵にした『三世相安政雑書萬曆大成』や時代に即した医療の知識を流布させた『三世相解嘉永大雑書』などの挿絵とおなじく、『永代大雑書萬曆大成』のそれらも社会史的にみて無視することはできないように思われる。

一二 日記など生活記録類からみた大雑書の位置

大雑書の歴史的成立やその内容について様々な視点から考察してみたが、では大雑書はどのような人々が所有しどのような機会に利用したものなのだろうかという問題に立ち戻ってみたい。

大雑書は近世後期から末期にかけて庶民が所持していたことはその出版経緯からみて確実なのであるが、その使用方法の具体的な検証については不鮮明である。というのも大雑書の使用頻度の高さから手擦れが激しく現代まで残されにくかったという理由のほかに、大雑書自体に記述された内容そのもののためにあまり公然と論及することを躊躇させる性格も災いしたのではなからうかと推察する。

というのも大雑書を開けば魂呼びのような古代から継承されたさまざまな迷信や呪い、さらには陰陽道や宿曜道の摩訶不思議な世界を垣間見ることになったから、それは秘密裡におこなわれるべきことであつたろう、と推察されるのである。いいかえると大雑書は個人に纏わる属性や未来を占うという不可視の世界を垣間見るための手引書として機能することを第一目的として出版されたものであったからである。表1からしられるように題箋に「三世相」と記される大雑書もある。「三世相」とは仏教の過去・現在・未来にわたる人の因果に起因しており、陰陽道でいう人の生年月日の干支や人相などをもとに三世の因果・善悪・吉凶を判断しようとするものであ

る。個人的で隠微な世界に踏み込むことでもあったことが題箋からもうかがえるわけである。小ぶりのものは折本の形式をとって「萬年曆」として流布し、農事曆として機能した大雑書もある。が、大雑書本来は陰陽道や曆註と日常生活全般の知識や指針とを相互に巧みに関連づけ、近世後期には、家相・人相・さまざまな雑占・夢判じをも取り込んで内容を肥大させ、百科全書の体裁を帯びたことは前に述べたとおりである。人智を超えた境界、ある意味不可解な領域に踏み込んだところに大雑書の存在の意味があるのであって秘儀的要素が大きく作用していたのである。それゆえ大雑書を実際どのような場合に用いたかその具体的な使い方について公に曝すことは憚られたことは十分理解されるところであろう。

最後にどのような階層の人々が大雑書を所有し、どのような意図で使用したのか若干の事例を示したい。

元禄から宝永年間に書き記された庶民史料に、河内国大ヶ塚村の豪家、河内屋五兵衛が記した『河内屋可正旧記』がある。そこには易にかんする記述が散見する。「易に云、徳すくなくして位高クのばり、智浅くして謀大なるハ、禍をこると有とかや」⁽²⁷⁾にはじまって、「易の事」の章では「易と云物は徳の多きもの也。近き比、当地東より西へ宿をかへんとする者、曆を見ければ西はふさがり也と有」⁽²⁸⁾とか、「可正隠居の事」の章でも「故ニ唐ノ黄帝ノ時ハ、桃板門ハ鬼門ニ（中略）移徙ノ儀ハ来霜月ノ事ニセヨ（中略）吉日ニ悪ヲナ

スニ必凶也。悪日ニ善ヲナスニ必吉也」⁽²⁹⁾と、方位や造作の指示、悪日や吉日に関する是非が記されており、世過ぎの術に易書や曆の類をたびたび開き参考にし、提言していたことが読み取れる。なおここでは具体的には明記されていないから大雑書からの引用とは断言できないが、近似する書物であることは容易に察せられる。

河内富田林の豪農、杉山家の寛文年間からの蔵書目録に、『塵劫記』『養生訓』『女大宝箱』『医道日用重宝記』『諸人日用宝』『万宝全書』などに混じって『大雑書』が収められていたとあるし、同じく柏原三田家の享保年間の書物売り立て払い記録に、重宝記・万宝・節用集の類が含まれている。⁽³⁰⁾ あらためて三田家「旧蔵書籍目録」⁽³¹⁾でみると、「万世大雑書三冊」「大雑書三冊」の所有が確認される。一八世紀前半では富裕層に限定されるかもしれないが、大雑書の使用を認めることができる。

高野山別当を務めた中橋家の「日次記」（中橋家文書日次記）（九度山町史編纂委員会『九度山町史』史料編別冊（二）、二〇〇〇年、国文学研究資料館国立史料館所蔵）には毎年十一月になると陰陽師、阿闍梨、それに伊勢外宮・内宮から御師がつぎつぎと入来し、彼らが曆を売り、お祓いや占いをしたことが記録されている。一例をとり出すと「延享四年十月廿七日甲丑 晴天 陰陽師入来（二四〇頁）、同四年十一月二日戊子（中略）柿むき仕候事、伊左衛門宅江いのこ振舞ニ元珍・お品参、外宮紀伊国幸福太夫使徳兵衛入来、御祓箱、

暦（ニはらや・ふはし・状）為土産持参、初尾米売斗式升入候事（先格也）（一四三頁）、延享四年十二月五日辛酉 朝ヨリ少雨四ツ時ヨリ上ル晴陰不定 内宮御師橋太夫入来ノ由ニ而御祓入（箱）・月参ノ御祓并（三）・ふし巻、状、右為初尾鳥目式百銅、月参ノ例ニ百銅、別ニ月参頼申候故、別ニ百銅遣ス之、西の垣内ニ有之奥平所持畑并田、神主佐内江売り候ニ付、境目石ヲ改、庄屋（金）立会居申、元玆立会候事（一四六頁）、延享四年十二月廿三日己卯 晴天（前略）一行阿闍梨出行ノ一枚曆ヲ惣分ノ正賢院義純房ヨリ貰う事、自慶房ヨリ星供ノ札到来（二四八頁）となる。つづいて天赦日には娘の入学、麦まき、喰い初めの祝や幟をあげて男児の通過儀礼を祝い、吉日には味噌を作りはじめ、幟を祝うこと、五開日（さびらき）、苗代種まきがあり、忌日には阿闍梨や僧に入学を頼むことなどが記される。ほかに徳日、不熟日、不成就日、八十八夜など暦の特別な日も厳密に添え記述してある（「中橋家日次記」は寛保四年〜明治三年までの記録）。

近世後期から末期にかけての生活記録―拙著『近世商家の儀礼と贈答』（岩田書院、二〇〇一）、脇田修・中川すがね編『幕末維新大阪町人記録』（清文堂出版、一九九四）、内田九州男・島野三千穂編『幕末維新京都町人日記―高木在中日記―』（清文堂出版、一九八九）、『サク女日記』（『羽曳野市史』第五巻 史料編三、一九八三）、『若山要助日記』上（『京都市歴史資料館編、一九九七』においても日記や祝儀・不祝儀文書のなかに、天赦日、八専、半夏生など、吉凶

や農事暦に関係する日取りが散見する。毎年入手する一枚摺りの暦か、折本形式の万年暦か、それとも大雑書の類であるのか正確なところはわからないが、それらをかなり参考に行動していたことは間違いない。

男女の相性占いのような個人的なことからで秘密裡に調べておきたいことについて、どのような使われ方をしたかは、さきに示した『好色一代男』の例で推測する程度だが、『サク女日記』には家相や婿養子の相性、それにおそらくは陰陽道がらみの星を觀てもらうことが記されている。陰陽師や加持祈禱の専門家のところへ出かけ觀相等を請うた話であり、庶民生活にさまざまな占いが幅を利かせていたことがうかがいしれ、まさしく「生活化された陰陽道」としての実践が記される。これらの記事から勘案して日常生活での相性、吉凶、教戒、開運などを調べようとして大雑書の書物類を捲ったことが十分想定される。大雑書が庶民に深く浸透していたことは紛れもないことなのである。

一三 小結にかえて

近松門左衛門作におさん・茂兵衛の心中もの『大経師昔暦』がある。大経師とは官暦の総発行元で暦の発行を独占し膨大な利益を得ていた。毎年十一月朔日はその発行日で新暦を公家全般に献上し、進上暦を江戸・大坂に下し売り捌くのだが、その日の賑いや馳走を

作る様子を「今日の霜月朔日を、元日とこそ祝いけれ⁽⁴⁾」と描写している。

大経師が暦によって莫大な利益に得ることに對し本屋仲間も黙っていないかった。それが種々雑多な大雑書の刊行へと繋がったことは想像に難くない。しかし単なる暦と大雑書類との大きな違いは大雑書が中世からの陰陽道関係の書物を含む公家・武士向き百科全書的な知識に加えて、第五節の『永代大雑書萬曆大成』の目次に示されたようないわゆる近世での雑多な生活情報をも貪欲に加えたことである。つまり板元が自己の所有する版權内での書籍を自由に裁量し、庶民の嗜好に合った題材を組み入れ、編集し直し、『永代大雑書萬曆大成』を頂点とするような種々の大雑書を出版していったのである。大雑書に求版・類版・海賊版などが出回ったのも庶民の需要があればこそであった。南方熊楠は少年期『大ざつしよ』を写して種々の知識を吸収したと伝えられ、小泉八雲の遺品『英訳 三世相永代大雑書萬曆大成』の絵入り原稿ノート一〇冊は天保一三年発兌の『永代大雑書萬曆大成』の写しであった。⁽⁵⁾ 庶民生活に利用された大雑書は、庶民の知識や知恵の集積物でもあり、それはあたかもシンクレティズムの権化として位置していたのである。

注

- (1) 式亭三馬『浮世風呂』(『日本古典文学大系』六三所収、岩波書店、一九五七)、七一頁。
- (2) 伊原敏郎『歌舞伎年表』第六卷、岩波書店、一九六一、五六三頁。
- (3) 中村璋八『日本陰陽道書の研究』汲古書院、増補版、二〇〇〇、三三五頁ほか。
- (4) 橋本萬平・小池淳一『寛永九年版大ざつしよ』岩田書院、一九九六、二二二～二三三頁。
- (5) 『国史大辞典』第二卷、第六卷。『日本国語大辞典』第二版、第二卷、第六卷。『永代大雑書萬曆大成』も曆註書や中国の書物を典拠としたことを明記(表1参照)。
- (6) 下出積世校注『神道大系』論説編十六 陰陽道、神道大系編輯會、一九八七、三～四頁。
- (7) 本稿で使用したのは筆者所蔵の『東方朔秘傳置文』で天保一三年新板、東都書林小林新兵衛・山城屋佐兵衛・岡田屋嘉七、浪花書林敦賀屋九兵衛。序は花山道人。ほかに『神道大系』論説編十六 陰陽道にも所収される。この奥付は貞享三年、摂州書林森田庄太郎板、序は摂陽入窓軒。
- (8) 『東方朔秘傳置文』天保一三、東都書林小林新兵衛・山城屋佐兵衛・岡田屋嘉七、浪花書林敦賀屋九兵衛、二六丁ウ～二七丁オ。
- (9) 『永代大雑書萬曆大成』天保一三年版、上段三五丁オ～三五丁ウ。
- (10) 『簞篋内傳』は前掲『神道大系』論説編十六に所収されている

ものを使用。

(11) 前掲書『寛永九年版大ざつしよ』では、夢占いの項目で『拾芥抄』からの引用を大まかに指摘する。

(12) 尊経閣文庫所蔵『拾芥抄』前田育徳会尊経閣文庫編、尊経閣善本影印集成一七、一九九八。

(13) 『伊勢物語』の歌は「百十 魂結び」に「思ひあまりいでにし魂のあるならむ夜ぶかく見えば魂結びせよ」

(14) 『源氏物語』「葵」には六条御息所の生霊が現れ、源氏の君に「なげきわび空に乱るるわが魂を結びとどめよしたがひのつま」と訴える。

(15) 前掲『日本陰陽道書の研究』四二一〜四四三頁。

(16) 前掲『日本陰陽道書の研究』四一二頁。

(17) 前掲『永代大雑書萬曆大成』十三「三鏡宝珠の説」八丁ウ。

(18) 前掲『寛永九年版大ざつしよ』一五四頁あたりから判断。

(19) 橋本万平『大ざつしよ』(こつう豆本・108) 日本古書通信社、一九九四。

(20) 表1には増補・改訂版も含む。実数は少し減るが江戸・上方以外の地域での大雑書の出版も考慮すると実際には百種類以上存在したと推定される。

(21) 「日用百科型節用集の使用態様の軽量化分析法について」『京大文学報』一九九二。ほかに「画像処理による節用集(日用百科書)の使用実態の分析」(『人文科学とコンピューター』十四一十六、一九九二)、「『文明人』の視覚」(横山俊夫編『視覚の一九世紀』思文閣出版、一九九二)に大雑書に関する論考が載る。ほかに小二田

誠二「事典と占い―「大雑書」の世界観―」(平成七年度・特定研究「言語文化の歴史的発展に果たした辞書の役割に関する特定研究」静岡大学人文学部言語文化学科、一九九六)があるがあまり参考にならない。

(22) たとえば『節用集大系』全百巻(大空社、一九九三〜一九九五)など。

(23) 元禄十五年刊『元禄太平記』(『都の錦集』叢書江戸文庫六所収、国書刊行会、一九八九、九五頁)。

(24) 『増益暦之抄』『萬寶雜書』『永曆雜書天文大成』『新撰雜書』『萬海雜書新探綱目』『三世相小鑑』『永代雜書』『拾遺綱目』『萬歳大雑書日用宝』が寛政・文化年間に敦九が出版を請け負った大雑書である。序で指摘するのはおそらく『萬寶雜書』『永曆雜書天文大成』『永代雜書』『拾遺綱目』『萬歳大雑書日用宝』か、それらの再版・増補板であろう。それらの完全版として『永代大雑書萬曆大成』の出版があったと見るべきなのだろう。

(25) 井上隆明『改訂増補近世書林板元總覧』(日本書誌学大系七六、青裳堂書店、一九九八、四八二頁)。

(26) 『大坂本屋仲間記録』第三卷(清文堂出版、一九八七)、一九頁。

(27) 長友千代治『江戸時代の図書流通』(佛教大学通信教育部、二〇〇二、二九三〜二九四頁)。

(28) ただ大雑書でも袖珍本のような小型本と美濃半本などでは収容される内容量が違うから、大型本に収載されたとしても小型本では省略される場合がある。本稿は『永代大雑書萬曆大成』をもとに考察することを本文中にこわった。

(29) 『永代大雑書萬曆大成』「二五一 人相指南秘訣」は二二三丁ウ
二四九丁オに及ぶ。

(30) 『東方朔秘傳置文』は『神道大系』論説編十六 陰陽道にも収
載されている。普通の大雑書では占いに戯れ歌のようなものが添え
られているが、『東方朔秘傳置文』にその記載はない。なお『東方
朔秘傳置文』は『大坂本屋仲間記録』の寛政二年(第一二巻)では
天文の項目に、文化九年(第一三巻)では易占の項に属す。

(31) 大阪図書出版業組合編『享保以後大阪出版書籍目録』大阪図書
出版業組合、一九三六。

(32) 『運氣根元福祿壽萬寶大雑書(題箋は運氣発揚萬録壽寶玉三世
相)』(瀬山順成堂、明治三五年刊)は銅板刷、内容は『永代大雑書
萬曆大成』とほとんど同じだが、西国・坂東・秩父の各観音札所を
載せるなど明らかに違う内容も含まれる。これなどは明治以降の新
情報といえるであろう。だが表1からもわかるように、明治以降の
大雑書は『永代大雑書萬曆大成』の踏襲か亜流という印象が強い。

(33) 岸雅裕『尾張の書林と出版』(日本書誌学大系八二 青裳堂書
店、一九九九)によると、大雑書関係は、天保十二年官許『萬代大
雑書』(小田切春江)、同年『随一大雑書』萬屋東平蔵板(二二三頁、
二二六頁)、『萬歳三世相』萬屋東平蔵板(二二七頁)、『新板大ざっし
ょ』菱屋久八、菱屋金兵衛(刊行年なし)(三四九頁、三五八頁)
の出版が確認されるが、本稿で取り上げた天保九年版『随一大雑書
古今大成』の記載はない。

(34) 『絵入日用女重宝記』(『江戸時代女性文庫五八』所収、大空社、
一九九六)、頁の記載ナシ。

(35) 岡本良一監修『花の下影』(清文堂出版、一九八六)、九四〇九
五頁。

(36) 大阪市史編纂所「今井家資料「浪華の花櫓」」「大阪の歴史」六
二号、一〇八〇一〇九頁。

(37) 野村豊・由井喜太郎編『河内屋可正旧記』(清文堂出版、一九
七〇、第二版)、二〇九頁。

(38) 前掲『河内屋可正旧記』九四頁。

(39) 前掲『河内屋可正旧記』一一八〇一一九頁。

(40) 今田洋三『江戸の本屋さん』(NHKブックス、一九七七)、四
一〇四二頁。

(41) 前掲『江戸の本屋さん』四五頁。

(42) 横田冬彦「益軒本の説者」(横山俊夫編『貝原益軒』所収、平
凡社、一九九五)、三三二〇三三三頁。

(43) 『サク女日記』より(原文通り)。「安永七年四月二日 森田ヨ
リ、家そう能見る人参り居り候ゆへ、あなた様は如何と尋に來り、
夕方ヨリ森田へ赤うちハ袴本遣し、母いかれ候、家相の話聞て、夕
方九時ニ帰られ候(九四六頁)。「七月二十九日 あじかわ清光院
にて、養子のみてもらい候(九五二頁)。「八月四日 夕過ニ大和
ヨリ卯八帰り、西村出雲正へ、ほしい大式袋遣し候、養子式口・三
口、吉悪見てもらい候(九六四頁)。「八月十日 地藏堂へ、四・五
人月生たの書て、星を尋ニ遣し候」(九五五頁)。

(44) 『完訳 日本の古典 近松門左衛門集』(小学館、一九八四版)、
八四頁。

(45) 前掲橋本万平『大ざつしよ』一〇〇一一頁。